

□ 9: 情報と倫理

9.1 「情報と倫理」

柴崎文一

bash@ccre.soken.ac.jp

教育研究交流センター/山形大学

- ・はじめに：高度情報化社会の現状

現代社会が高度な情報化の時代を迎えているということに、今日、異を唱える人はないだろう。

「情報」をキーワードとした、この数ヶ月間の我が国における動きを見ても、一般に「盗聴法」と言われる「通信傍受法案」の可決・成立を初めとして、NTT職員による顧客個人情報の不正流出事件や、大学・研究機関ネットワークへの不正侵入事件など、とくにコンピュータネットワークを介した情報通信関連の事件や話題を目にすることのない日は、むしろ稀であると言っても過言ではない。

しかし、こうした「情報化」の現状に対する行政や立法、そして何よりも我々の社会における一般的な傾向は、時々刻々と生起しつつある「情報化」に起因した事件や出来事に、その場ごとの暗中摸索的な対処を行うことで生一杯だというのが実状である。少なくとも私には、こうした情報化の動向に対する社会の一般的な対処の基底に、確固とした「原理」や「原則」があるようにはともて思えない。そしてまた、現代の高度な情報化社会の現状に直面し、いかなる「原理」に基づいた対処を講じるべきかの方策をもっていないという姿こそ、我々の社会の現実であるとも思われる。

- ・問題の緊急性

これが、我々個々人の権利や利益に係わらないものであるならば、この問題への対処を考案する、多少の時間的な余裕もあるかもしれない。しかし、情報化社会の問題は、個々人の権利を脅かす要素をもつものであるばかりか、国家や社会の安全をも損なわしめる危険性を有するものであり、ここには一刻の猶予もないと言わなければならない。

ある人物が一人の女性の実名と電話番号をインターネット上の「掲示板」に書き込みましたとしよう。その日から、その女性の電話は、夜中鳴り続けるであろうことを想像することは難くない。あるいは電話番号から住所を調べ出され、得体のしれない者どもから、毎日つけまわされることになるかもしれない。

または、アメリカの『ウォーゲーム』という映画の話だが、パソコン好きの少年が、ペンタゴンのコンピュータに侵入し、悪戯をしたことから、核戦争が勃発しそうになるというストーリーに、記憶のある方も少なくはないだろう。

もちろん、ペンタゴンやCIAのコンピュータに少年が実際に侵入するということは、ほとんど考えられない。だが、もし誰かがこうした機関のコンピュータに侵入し、悪意ある操作ができたとしたら、そのことが世界の安全を根底から脅かしかねないことにもなる。これが高度に情報化された現代社会の実情であるということには、異論の余地はないだろう。

- ・「情報」：何が変わったのか？

個々の情報の質ということでは、以前も今も、それほど変わるものではない。例えばそれは、個人の名前と電話番号の結びつきであったり、何時何分何秒にどこから、どこに向けて核弾頭ミサイルが発射されたといった情報であるかもしれない。いずれにしてもこれらは、特定の事実に

関する記述 description であり、手書きのメモや口頭でも伝達することはできる。

しかし、量という面では、現代の「情報」をめぐる状況は、劇的な変化を遂げている。ここにはもちろん、我々がごく日常的に触れる情報も含まれるが、科学と技術の高度な発達とともに日々発見／生産されつつある科学的情報も膨大な量にのぼる。なかでも人類を含めた「全自然」の行く末にとって、極めて大きな意味をもちうる「遺伝子情報」などは、その意義においても量においても、現代の「情報」をめぐる状況を象徴するものであると言ってもよいだろう。とくにヒトの遺伝子情報などは、プライバシーや人生観などの「人間の生」に直接関わる側面を強く有しており、現在、倫理的観点からの討議が盛んに行われているところでもある。

そしてもう一つ、過去と現在の「情報」をめぐる動きのながで、量とともに大きな変化をもたらしているものがある。それは言うまでもなく、情報の伝達システムである。なかでもインターネットに代表される情報通信システムのもたらした変化には驚異的なものがある。

・ 誰にもコントロールできないインターネット

インターネットは、いわゆる「センター」をもたないネットワークシステムである。全体の統一性は、ネットワークに参加する通信主体が、プロトコルと呼ばれる通信規約に従うことによって実現されている。このことは、このネットワーク全体のメカニズムや、グローバルな情報伝達の経路を制御できる特権者は存在しないということの意味している。従ってWWW (World Wide Web) などのように、受信相手が特定されていない情報が、一度このネットワーク上に公開／発信されると、通常は、特定の個人や集団によって、発信された情報の伝達が阻止されたり、伝達経路をコントロールされることはない。また、受信相手を特定しない／できない情報の伝達システムをもっているということも、インターネットの特徴である。上述の名前と電話番号を公開された女性の被害例などは、インターネットのもつこうした特質に起因するものであると言えよう。

・ インターネット時代の恐怖

インターネット社会のかかえる問題点はこればかりではない。

今日、我々の生活世界は、あらゆる面が電気的なシステムによって制御されている。小さなところで言うなら、洗濯機や冷蔵庫などの家庭電化製品には、たいていマイコンと呼ばれる組み込み制御システムが使用されている。大きなところでは、おそらくアメリカのペンタゴンなどは、世界で最も大きく、かつ細密なコンピュータネットワークによる制御システムを有した組織であると言えるだろう。

これらのシステムが相互に孤立しているか、もしくは閉じたLAN (Local Area Network) において機能するだけであれば、危険性はそれほど高いものではないと言えるかもしれない。しかし、世界の安全と直接係わるペンタゴンこそ、インターネットの成立と深く係わるものであり、また今日ペンタゴンが、インターネットを初めとする各種の情報通信ネットワークを利用した、高度な情報戦略を強く志向しているということは周知の事実である。

とくにインターネットのような情報通信システムは、軍事目的にも、まことに都合がよいシステムになっていると言える。なぜならインターネットは、上述の如く、原理的には、各通信主体が通信プロトコルを順守することによって、ネットワーク全体の維持が実現されているために、巨大なネットワークを維持するためのコストや労力を必要としないにも係わらず、世界中に張り巡らされた情報伝達資源を利用することができるからである。

しかし、当然のことながら、インターネットのもつ情報伝達資源の恩恵に浴するところが大きければあるほど、そのシステムにおけるインターネットへの依存性は高いものとなる。今日、インターネットへは家庭のPCからでも接続することができる。このことは、認証システムさせ通過することができれば、私のPCからさえ、ペンタゴンのネットワークに侵入することができるということを意味している。

もちろん、重大な軍事行為の開始には、幾重にもその妥当性と正当性が検証されるに違いない。しかし、その検証作業も情報ネットワークを介して行われるであろうことは想像に難くない。したがって、ペンタゴンのネットワークに侵入し、そのシステムを詳細に解析した上で、検証過程で使用されるネットワーク上の情報を操作することができれば、世界の安全を脅かすような出来事が発生させることも、可能であるということになる。安物の映画ストーリーのように思われるかもしれないが、可能性としてはゼロではない。これは正にインターネット時代がもたらした潜在的な恐怖であると言えよう¹。

・ ライフラインとしての情報ネットワーク

ここまで大げさな話ではなくとも、現代の我々の生活が、情報通信ネットワークといかに密接な係わりをもっているかということは、少し考えればすぐに分かることである。

NTTデータのテレビCMだったと思うが、こんな場面が放映されていた。スーパーマーケットの中を2人の女性が歩いている。一方の女性が、「私はコンピュータなんて大嫌い、一晩中、CD-ROMを出し入れしたり、キーボードをカチカチ叩いたりしている人がいるけど、あんなにクダナイものはない。…」などと言う。すると画面は一変し、「もしコンピュータネットワークがなかったら。…」という状況が映しだされる。マーケットの陳列棚には、ほとんど物のない状況が映しだされるのである。

私はこのCMを見たとき、じつに上手く、現代人の生活と情報通信ネットワークの関係を描いていると思った。好むと好まざるとに拘らず、現代人の日常は生活の隅々にいたるまで、情報通信ネットワークに規定されており、一度このネットワークに事故が発生すれば、我々の日常生活はその全般に渡り、大きな影響を被ることになるのである。現代人にとって、情報通信ネットワークは、すでに欠くことのできないライフラインの一つにまで数えあげられべき存在になっていると言ってもよいかもかもしれない。

・ 情報と倫理

もちろん、従来型のメディアや通信システムにも、不特定多数の人間に向けて情報を発信する手段や、リモートアクセスの手段は存在していた。しかし、情報の伝達される規模やスピード、さらには他のシステムとの相互性において、インターネットを初めとした現代の情報通信システムがもつ影響力と複雑性は、従来型メディアシステムの比ではない。とくにインターネットなどは、その情報伝達能力において、「スーパーマスメディア」と呼ぶにふさわしい、スピードと広がりをもっている。

このような情報通信システムの出現によって、人類は、いまだかつて経験したことのない環境世界の到来に直面していると言っても過言ではない。そしてこの急速な情報化社会で生起している問題の多くは、上述のように、人権や安全性に関わる極めて倫理的な問題であるという性格もっている。それゆえここではまず、倫理的な探求が要請されることになるだろう。しかし、情報化の問題が、社会のあらゆる面に大きな影響を及ぼしているということは、この問題の解決に向けた探求も、狭義での倫理的探求のみでは不十分であるということを示唆している。換言すれば、情報化社会の問題に対する取り組みには、「情報と倫理」に関連する諸科学的観点からの多角的で総合的なアプローチが求められているのである。

以上の諸点から、私はここに、既存の枠組みを超えて「情報と倫理」に関する問題の討議を

¹逆の事例ではあるが、今春のユーゴスラビア・コソボ自治州の民族紛争で、米国防総省がユーゴ・ミロシェビッチ政権かく乱のため、民生用も含むコンピューターネットワークを混乱させる「サイバー戦争計画」を立案していたことが報じられている。

目的とする新しい学問分野の必要性を強く主張し、その実現を目差すグループの結成を提唱するものである。